



学校だより



9月号

令和6年9月2日
江戸川区立瑞江小学校

「想像する力」をこれからも

校長 牧岡 優美子

今夏も猛暑と言われ、もはやこれが日常になってきました。夏季休業中に予定していた水泳指導も、熱中症警戒アラート発令や暑さ指数によって連日中止になりました。昼間は熱中症を避けるために外に出ない子も多かったようです。道路は焼けた鉄板のようになった危険な夏、他にも台風やゲリラ雷雨、南海トラフ地震などの災害もありました。ですから長い夏休みを終え、無事に学校へ戻ってきた子どもたちを見てほっと安心しました。

さて、夏休み中にいくつかの講演を聞く機会がありました。「読書はデジタルか本か」「AIをどう取り入れるか」をテーマにしたものでしたが、偶然にも共通のキーワードがありました。「想像する力」です。

作家のくすのき しげのりさんは、小学国語3年の教科書に「メロディ」という作品が掲載されています。原作の絵本には音楽記号（セーニョ/D.C/Fine）が付いていて32ページの文章を36ページで読む仕掛けがあります。時間軸を自由に楽しみながら「想像する力」を発揮して本をめくり、心を揺らしてほしいと言っていました。読書によって心の窓を開き、「想像する力」によって子どもたちの人生が豊かになるようにと願っているそうです。

また、作家の石井 睦美さんは、小学国語5年の教科書で「銀色の裏地」という作品を執筆しています。「銀色の裏地」という言葉は「曇り空の裏側は太陽に照らされて銀色に輝いている。悪いことの反面には、必ず希望の兆しがある。その向こう側を想像することで生きる希望をもってほしい」という想いです。「想像する力」は前向きに生きていくための大きな力になることを伝えたかったそうです。

他に、脳科学者の茂木 健一郎さんの講演も聞きました。「想像するという能力を人間は手放してはいけない」という話です。今は生成AIが発達してきて、任せておけば色々なことが解決するけれど、AIは先を想像しながら臨機応変に対応することが苦手。脳科学で言うとデジタルで読書すると後頭葉が反応、本で読むとページをめくる手触り、質感、においによって想像が促進し、前頭前野が活発に刺激されるので、子どもの脳は本の読書を薦めたい。「テクノロジー推進のビル・ゲイツ氏も、我が子には14歳までデジタルを規制していましたよ」と。人間が獲得した「想像する力」は、人間の強みだそうです。子どもたちが人を思いやり、未来を考えるために必要な「想像する力」を育てる教育活動の大切さを感じています。

2学期は多くの学校行事、校外活動を計画しております。しばらくは厳しい暑さが続きますが、2学期もどうぞよろしく願いいたします。